Osaka Shoin Women's University Repository

信光の能と漢詩

西畑　実

はじめに

有名な詩歌の言葉を「能の風体に依りてとりあてがふ」ことが、「能を書く」ことであるとすれば、謡曲の詞章に漢詩がいかに引用されているかというところに、能作者の文体的特色を探ってみるのも悪くないであろう。ただ、漢詩は分量が問題になるので、部分的にしか引用しにくいという制約は確かに存するけれども、ある取り方においては、そこに謡曲作者としての個性が発揮されているように思われるからである。この小論では、まず漢詩の引用方法を明らかにしたうえ、それと信光の作風との連関性にまで論及してみたいと思う。

1　引用詩句の出典

謡曲（現行曲）における漢詩の利用については、すでに佐成謙太郎氏の詳細な調査（『能楽全書』才三巻所収「謡曲と漢詩―謡曲引詩考―」）があるが、番外曲を扱ったものにはまだ纏ったものがないようであるから、ここに、室町時代（慶長以前）の成立と推定されている曲（田中允氏「謡曲の廃曲」『能楽全書』才三巻所収）について、私の調査したところを示しておこう。

調査の対象とした番外曲約二百四十番のうち、約六割の曲が漢詩を引用しており、引用回数は延べで二百六十ほどになる。さらに、主な出典を記すと、『和漢朗詠集』が八十四首、『三体詩』が十四首、『白氏文集』

Osaka Shoin Women's University Repository

（『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』所収の詩を除く）が十一首、以下『新撰朗詠集』四首、『百聯抄解』二首ということになろう。(注)

この数値は、佐成氏の調査と比較してみても、さほど大きな差異は認められないけれども、出典の面で『百聯抄解』と『三体詩』との位置が逆転していることが注意を惹く。しかし、修辞上の特徴を摑むには、どんな原典から漢詩を蒐集して来ているかということよりも、むしろその利用の仕方の方に問題があることはいうまでもあるまい。

3　漢詩の引き方

謡曲における漢詩文の引き方は、いくつかの型に分類することができようが、はやく坂本雪鳥は次のように説いている。

全く原文のまゝ挿入したもの、翻訳したともいふべきもの、切り刻んで入れたものという風に、和歌の場合と同じく種々の取り方を用ひてゐる。（『謡曲講座』所収「謡曲文の組織」）

また、佐成氏の「謡曲と漢詩―謡曲引詩考―」には、

原形のまゝ吟詠する――「時の調子をとりあへず、渡口の郵船は風静まつて出づ、波頭の謫所は日晴れて見ゆ」（舟弁慶）

詩句を肯定する――「げにや、春を送るに舟車を動かす事を用ひず、たゞ残鶯と落花とに別る」（藤）

詩句を論証とする――「遥かに人家を見て花あれば即ち入る、論ぜず貴賤と親疎とを辨へぬをこそ、春の習ひと聞くものを」（鞍馬天狗）

又はこれを逆用する――「曉梁王の園に入らざれども雪群山に満ち、夜度公が楼に登らねども月千里に明らかなり」（竹雪）

詩句を序詞に用ひる――「風枯木を吹けば晴天の雨、月平沙を照らせば夏の夜の霜の起居も安からで」（経

Osaka Shoin Women's University Repository

政）

詞章中に同化せしめる――「いかで燈火を背くなよ、朝長を共に憐みて、深夜の月も影添ひて、光陰を惜しみ給へや」（朝長）

のように、文体的な面からの分類がなされており、さらに、小山弘志氏は、「謡曲を読むために」（『時代別作品別解釈文法』所収）において、

説明的に扱われることも多いし、また引用されることも比較的少なく、しかも同一の詩句がしばしば用いられているのが常である。

シテの心情の表現にも使用される。

全句をそのまま引用して、シテにその動作をさせる場合もある。

というふうに、引用された詩句の謡曲の詞章に及ぼす表現効果に重きを置かれた分け方をなされている。かように、基準をどこに置くかが分類の型に結びついているわけであるが、ここでは、主として佐成氏の分類を踏まえつつ、漢詩取りの様式について考察を進めて行くことにする。

まず、「原型のまま吟詠する」引き方には、（「舟弁慶」）のように、才三者的な叙述の内部に置かれた場合と、「宮漏高く立つて、風北に巡り、隣砧緩く急にして、月西に流る」（「砧」）のごとく、才一人称で物語る文章に挿入せられている場合とがある。かかる採り方を朗詠型と呼ぶことにするが、同じ型とはいえ、前者が漢詩をあくまでも他者の言葉として利用しているのに、後者はそれを自己の心情に引きつけて採り入れているところが異なっている。

つぎに、「詩句を肯定する」もしくは「詩句を論証とする」採入れ方について述べると、ともに詩句を援用して発言者の心情を表明しているという点において、行き方を同じくしているように思われる。――ただし、肯定する際には、「八月九月、げに正に長き夜、千声万声の、憂きを人に知らせばや」（「砧」）、「まことなるかな

Osaka Shoin Women's University Repository

松花の色、十廻りをなす春秋の、いく久しさの色ならん」（「阿古屋松」）のように、傍線の語を伴うことが多いようであるが、――いずれも漢詩を判断の拠りどころにしていることは明らかであるから、これを引拠型と呼んでもさしつかえないであろう。

今度は、詩句を「逆用する」場合について考えてみよう。「竹雪」の例は、「暁入梁王之苑　雪満群山　夜登廋公之楼　月明千里」（『和漢朗詠集』）からの引用であるが、原詩の内容を否定的に採り入れることによって、金殿玉楼ならざる処からの眺望を描き出すのに成功しており、また、「天長地久有時尽」（長恨哥）に依拠した「この契り天長く地久しくして尽くる時もあるまじ」（「皇帝」）も、本説の心を正反対に取なして、玄宗皇帝と楊貴妃との恋愛の恒久を表現している。かかる引用手法――「翻訳したともいふべきもの」――と、「本歌に贈答したる体」（『愚問賢注』）、「古歌に贈答したる体あるべし。有りといふに無しといひ、見るといふに見ずといへる是なり。」（『和歌用意条々』）のごとき本歌取りの型との間に、共通性が存することを想起するとき、これに「反戻型」という名称を与えてもいいのではないかと思うのである。

それでは、「詩句を序詞に用ひる」という手法に視点を移そう。これには、「経政」のように、小段（サシ）の冒頭から詩句を引き、同音を利用して「起居」を云い出すための序としている場合と、「ただこれ雨露の恵みにて、養ひ得ては、花の父母たる雨露の、翁も養はれて」（「養老」）のごとく、詞章の中に取込まれた詞句が次句の序を兼ねている場合とが考えられる。いずれにしても、引用詩句が修飾節としての機能を果していることは確かであるから、これを修飾型ということにしよう。なお、詩句が序詞に用いられていなくても、限定修飾の働きをしている場合は、この型に属せしめることにする。

風破窓を射て燈火消えやすく、月疎屋を穿ちて夢なりがたき、秋の夜すがら所から（「芭蕉」）

緑樹重陰四林におほひ、青苔日々にあつうして、おのづから塵なき木の本を、はらはぬ風の朝ぎよめ、紅さそふ嵐かな（「巴園」）

最後に、「詞章中に同化せしめる」引用法について述べておく。「朝長」の例は、「背燈共憐深夜月」の詩句

Osaka Shoin Women's University Repository

を分割して詞章中に取り込む――切り刻んで入れる――ことにより、深夜の雰囲気を醸成せしめている。本歌取りの型と比べると、「本歌の心になりかへりて、しかも本歌をへつらはずして、あたらしき心をよめる体」（『愚問賢注』）に近い手法だといえようが、詠唱中に詩句を裁ち入れているところから、これを裁入型と称えることにしたいと思うのである。かように漢詩から詞を集めて書き連らねる手法もまた、坂本雪鳥のいうところの「翻訳したともいふべきもの」の一つに数えられるのではあるまいか。

以上を要約すると、謡曲における漢詩引用の型は、引言型と包摂型とに二大別することが可能であり、前者はさらに朗詠型と引拠型とに分かたれ、後者は反戻型、修飾型、裁入型に分類される。引言型の場合は、いかなる場にいかなる詩句を引いているか、登場人物の心情を引詩がいかに代弁しているかが考察の中心となるが、能作者の個性は、むしろ包摂型においてより多く見出されるといえる。これを図式化すれば、次のようになろう。

原文のまま挿入したもの
- 原型のまゝ吟詠する（朗詠型）
- 詩句を肯定もしくは論証とする（引拠型）
- 詩句を序詞に用ひる（修飾型）

翻訳したとでもいふべきもの
- 詩句を逆用する（反戻型）

切り刻んで入れたもの
- 詞章中に同化せしめる（裁入型）

（引言型：朗詠型・引拠型／包摂型：反戻型・裁入型）

3　本歌取りの型との対比

ここで、謡曲における引き歌の形態について考えてみることにしよう。

朗詠型――見れば旅宿の題をすゑ、行き暮れて、木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし、忠度と書かれたり（「忠度」）

引拠型――げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の（「隅田川」）

Osaka Shoin Women's University Repository

反戻型――時雨せぬ夜も時雨する、木の葉の雨の音づれに、老いの、涙もいとふかき、心を染めて色々の、木の葉衣の袖の上（「雨月」）

修飾型――君が代は千代に八千代にさざれ石の、巌となりて苔のむす、松の葉色も常磐山、緑の空ものどかにて（「弓八幡」）

裁入型――かくて時刻も移り行く、雲に嵐の声すなり、散るか真柝の葛城の、神の契りの夜かけて、月の杯さす袖も（「紅葉狩」）

このような用例からも、謡曲においては、和歌の場合も漢詩の場合も引用され方が同様であることがわかるであろうが、それでは、謡曲における引歌もしくは引詩様式と和歌における本歌取りの型との間に何らかの関連が認められないであろうか。

本歌取りは、いうまでもなく、鎌倉時代の初頭にもつとも盛んに行なわれた和歌の修辞法の一つである。その取り方はかなり複雑な様相を呈しているけれども、私は『八雲御抄』『竹園抄』『井蛙抄』『愚問賢注』などの記事を手掛りとして、基本的な型を左のように考えてみたのである（拙稿「西行の本歌取り」『大阪樟蔭女子大学論集』才五号）。

包摂型 ―― 転換型 / 延長型

贈答型 ―― 逆想型 / 反戻型

擬態型

引用型

引用の型そのものに即していえば、両者の間にそれほど著しい径庭は存しないようであるが、本歌取りの場合は、古歌を採り入れる際に、分量、位置、新旧、主ある詞、同心、同題、明確さを顧慮しなければならないのに

Osaka Shoin Women's University Repository

対し（石田吉貞博士『藤原定家の研究』）、謡曲の場合は、「詞を集め」るときに、「優しくて理の即ちに聞ゆるならんずる詩句の言葉」（『風姿花伝』）もしくは「聞く所は耳近に、面白き言葉」（同書）を心掛けなければならず、また、挿入される詩歌は小段の性格によつて制約を受けるところが異なつているといえよう。かようにかなり制約の多い漢詩取りにおいて、謡曲作者の伎倆はいかに発揮されているであろうか。

5　詩句引用における信光的特色

信光の能に引用されている漢詩がいかなる小段に置かれているかというと、次のようになる。（括孤内の数字は、引用している詩句の数である）

(一) 哥の類
- 上ゲ哥　巴園・吉野天人・皇帝（2）・龍虎（2）
- 段哥　安宅

(二) クセ　巴園（2）遊行柳・皇帝（3）

(三) 詠の類
- 一セイ　張良
- ワカ　紅葉狩
- 詠　舟弁慶

(四) サシの類
- サシ　玉井・巴園・太施太子・飛加美・亀井・遊行柳（2）・皇帝（2）・紅葉狩・羅生門・龍虎（2）・韋駄天
- 掛ケ合　皇帝

(五) 大ノリ地　胡蝶（3）・遊行柳・道城寺・紅葉狩

(六) その他　龍虎（2）

このうち、信光の文体的特色が比較的よく現われている――例えば、世阿弥と比較した場合、すくなくとも世阿弥はこのような引き方はしないという意味において――のは、どの小段においてであろうか。

Osaka Shoin Women's University Repository

(1) サ　シ

実や釣をやめ、帰りさつて船をつながず、江村月落てまさにねむるにたへたり、小船とて一夜風吹かざれどもただろくは、山水の辺にあり（「飛加美」）

面白や、宿雨はじめてをさまり、草木こまやかなり、群鴉とびつくすげだうのかね、ちやうらうぶじにして僧院に帰る、げにひねもすに門前に、ただひとり見る松陰の、こけの下道しづかなり（「韋駄天」）

古墳何れの国の人ぞ、姓と名を知らず、化して路傍の土となつて、年々春草生ず（「亀井」）

林間に酒を煖めて紅葉を焼くとかや、げに面白や所から、巌の上の苔莚（「紅葉狩」）

サシにおいて、才一に注意を惹くのは、一首の漢詩をそのまま引く場合が多いことである。すなわち、「飛加美」「韋駄天」は七言絶句、「亀井」は五言絶句をそのままの形で採り入れているが、佐成氏の調査に従えば、現行曲において三句以上採つているのは、三笑、道明寺、経政、女郎花、三井寺の数番に過ぎず、しかもすべて作者不明の曲なのである。世阿弥の作品にも、「才一才二の絃は、索々たり、才三才四の絃は、冷々として、秋の風の、音は村雨」（「逢坂物狂」）のように、二句を超えるものが存するけれども、全詩をそのまま採り入れているわけではない。（このような形態は、室町期の能においては、長俊作と考えられる「葛城天狗」に見えているに過ぎないようであるから、あるいはかかる引用法は信光の創始したものかとも思われる。）

才二には、概して引用詩句が発言者の心情を表現するよりも叙景的な部分を彩る傾向が強いということである。もつとも、「亀井」の例は心情表示への傾斜を見せており、「有難や四海の安危は掌の内に照らし、百王の理乱は心の中に懸けたり」（「羅生門」）のごときも見出されなくはないが、そうした引き方は信光の能には極めて乏しい。

(2) ク　セ

尉が栖はここなれや、(一)はんせきすいらただ是家、(二)ひやうにはくこけん仙の水、又かなへにはふようふくくわの、しやをねるすまひも目前、見るめにあまる橘の（「巴園」）

Osaka Shoin Women's University Repository

(一)(二)はそれぞれ別の詩からの引用で、原詩の一句ないしは二句を引用しているのに過ぎないのであるが、三句連らねて――並列的に――引かれているから、全詩をそのまま挿入することと大して選ぶところがない。こういう並列的な採り入れ方は、世阿弥の能には見られないようである。

(3) 大ノリ地

點野内野も程近く、野花黄蝶春風を領し、花前に蝶舞ふ紛々たる雪を廻らす舞の袖、返す返すも、おもしろや（「胡蝶」）

寺でらの鐘、月落ち鳥啼いて、霜雪天に、満ち潮程なく、干高の寺の、江村の漁火、愁ひに対して、人びと眠れば（「道成寺」）

「胡蝶」）は詩句を並列的に、また、「道成寺」は、一首の詩を三句にわたつて引用しているところに、信光の文体的特徴がよく窺える。しかし、より興味を覚えるのは、動的な印象（ゆるやかな動きではあるが）を与えるような詩句を叙事的表現のなかに取り込んで、シテの風情を引き出そうとする――「音曲より働きを生じさせ」（『風姿花伝』）る――前者の手法に対してである。そうした用例としては、一句のみの挿入ではあるが、

春夏秋の花も尽きて、霜を帯びたる白菊の、花折り残す枝を廻り、廻り廻るや小車の（「胡蝶」）

のごときがある。

今度は、世阿弥の能から、詩句を挿入した叙事的な部分の詞章を挙げてみよう。

嵐も雪も散りしくや、花を踏んでは同じく惜しむ少年の、春の夜は明けにけりや（「西行桜」）

おん前を立つてあたりなる、この池波の岸に臨みて、水の緑も影映る柳の枝垂れて、気霽れては、風新柳の髪を梳り、氷消えては波旧苔の、鬚を洗ひて見れば（「実盛」）

月毛のこの駒を、引き立て見れば不思議やな、もとのごとくに歩みゆく、越鳥南枝に巣を掛け、胡馬北風に嘶えたり（「蟻通」）

Osaka Shoin Women's University Repository

魚は喜び鰭ふるや、水を穿ちて岸陰の、潭荷葉動くこれ魚の遊ぶ有様の（「放生川」）

ここに掲げた例は、ことごとく裁入型であり、シテの所作ないしは情況を表示するものであるが、大体において、信光のように単純な引用法を採用してはいないのである。「西行桜」の引用詩句は、「散りしくや」と「春の夜」とのつなぎ言葉的な働きをもなしているし、「実盛」や「蟻通」のそれに至つては、その一部が他の部分に対して序詞としての位置を主張してさえいるというぐあいに、挿入に際して、はなはだ複雑な手続きを踏んでいるが、信光の裁入型には、このような取り方はほとんど見当らないといつてもよい。

次に、金春禅竹の引用法について一見しておくことにする。

折しも秋なかば、三五夜中の新月の、二千里の外までも、心知らるる秋の空、雨はまた瀟湘の夜のあはれぞ思はるる（「雨月」）

惜しまじな月も仮寝の露の宿、軒も垣ほも古寺の、愁ひは崖寺のふるに破れ、魂は山行の、深きに傷ましむ、月の影もすさまじや。誰かいつし、蘭省の花の時、錦帳の下とは、廬山の雨の夜、草庵の中ぞ思はるる（「芭蕉」）

燈火を背けて向ふ月のもと、共に憐む深き夜の、心を知るも法の人の、教へのままなる心こそ、思ひの家ながら、火宅を出づる道なれや（同）

禅竹の能は確実な作品に乏しいので、資料的に偏る嫌いがあることは否めないにしても、これを見ると、禅竹の特色は心情表現にあることがわかる。裁ち入れられた漢詩そのものが非常に抒情性に富んでいるうえ、「心知らるる」「心を知るも」「思はるる」などの語を伴なつていることがそれを物語つているといえよう。しかしながら、それらは、倒置して形で引かれていたり、あるいは幾分形態が捩じ曲げられて挿入されたりしているなど、表現の型にすこぶるこりが認められることから考えて、禅竹の引用態度には非常に知的なものがあることを了得せざるを得ない。こうした手法は、信光の能においては、発言者の感情を表示する部分はもとより、叙事的ないしは叙景的な部分にもほとんど見られないようである。

Osaka Shoin Women's University Repository

6　信光の作風と引用詩歌

信光の能における漢詩の引用法はすでに述べた通りであるが、ここで、引き歌について記すと、信光は『新古今集』の歌――特に感覚的だといわれる「新古今歌人」の作品――を、あまりひねらないで、発声されるままに容易に理解できる形で、シテの動作もしくは情景を彩るべく引用する傾向がある（拙稿「謡曲における引き歌――信光の能を中心に――」『大阪樟蔭女子大学論集』才四号）。こういう手法は、世阿弥の言に従えば、「理の即ちに聞」（『風姿花伝』）える引き方だといえる。かかる意味において、引き歌に対する態度には信光と世阿弥との間に一脈通じるものがあるが、作能の面でも世阿弥の傾向を庶幾していると見られる禅竹の手法は、彼らに比して、よほど行き方を異にしている。すなわち、禅竹は、和歌を詞章に採り入れる際に、その内容を否定的に摂取する方法――反戻型――において、独自性を発揮しているのである。それは、必然的に「理の現はるる」（『申楽談儀』）引用法から遠くなりがちであり、禅竹の「能を書く」面における理智的姿勢と密接なかかわりを持っている（拙稿「謡曲における引歌様式――禅竹関係の能を中心に――」『大阪城南女子短期大学研究紀要』才一巻）。このような知的な態度が、また、漢詞文の引用方法にも反映していることは、既述のごとくである。

それでは、信光の詩歌引用法は、作風とどのように結びついているのであろうか。

世阿弥の能が、舞歌を重視し、「筋の展開よりも舞台に美しい純粋な詩を描こうと専心」（無形文化財全書3『能と狂言』）した結果、先人の名文――優雅な詩歌――を巧みに繋ぎ合わせることによつて、「玉をみがき、花をつめる幽曲」（『至花道』）を作り出しているのに対し、信光は、「文章の才能が豊かであり」、「詞章に世阿弥的な詩味を十分に盛り込み得」（能勢朝次博士『能楽芸道』）ていながら、作能の傾向は世阿弥とは大いに違つたものとなつている――ショウ的な能に創意を見せているという意味において――が、こうした方向がおのづから詩句の引用法を規定するに至つたことは、明らかであろう。風流能というのは、花やかで観客の官能にじかに訴えかけようとする要素が強く、一つの情緒を味わうというよりも、むしろ部分的な動きの面白さを楽し

Osaka Shoin Women's University Repository

むものと説かれている。信光が型所に詩句を並列的に採り入れているのは、「部分的な動き」を彩るためのものであつた。また、「道成寺」の大ノリ地に引かれた漢詩は、確かに季節が合わないが、文飾が主であるにせよ、そうした無理を敢えて冒しているのは、所詮、信光の能が、「聞より出で来る能」ないしは「心より出で来る能」ではなくて、「見より出でくる能」だからであろう。それは、また、信光の能における引用詩句が発言者の心境を端的に表現する部分よりも、シテの風情もしくは情況を表示する部分に見られることが多い事実とも結び付いていよう。しかも、その書き連らね方においても、なるべく意味が即座に理解できるように取り入れてあるのである。信光が、『唐詩選』に比して、『三体詩』の「より日常的であり、生活詩的な方面に傾き、淡々たる抒情性を主とする」（村上哲見氏『三体詩』）詩を多く引いているのは、――巴園・飛加美・遊行柳・胡蝶・道成寺・龍虎・韋駄天――「明日の命もわからない日々を送つている人々を観客とする」（横道万里雄氏『日本の劇文学』）能を書くうえに効果的であつたに違いない。以上のような詩歌引用法は、修辞的な面において、世阿弥的な行き方を継承しながら、風流能に新生面を開拓した信光の当然たどるべき道であつたのであり、そこに、朧化主義の文体によつて、世阿弥の傾向を押し進めて行つた禅竹とは異なつた意味での創造性が認められるのである。

注　主な出典に見える詩句とその用例とを挙げれば次のようになる（その他の漢朝もしくは本朝の詩は省略した）。なお、○印を附したのは、佐成氏の調査に見えない詩句である。

（一）　和漢朗詠集

東岸西岸之柳　遅速不同　南枝北枝梅　開落已異（慶滋保胤）

春の風に綻び散る花も、次第階級千古にあり、かいらく既にことならず。秋の夜の月にさへぎる浮雲も、風に遅速の有るなれば、いかで風勢定むべき（謡曲叢書本「姿相天」）

東岸西岸の柳の色、遅速同じからねども、一味の雨のふりぬれば（謡曲叢書本「西岸居士」）

Osaka Shoin Women's University Repository

南枝北枝の梅の花、開落既にことなりけり（古典文庫本「北野物狂」）

紫塵懶蕨人拳手　碧玉寒蘆錐脱嚢（小野篁）

涙を流す心ざし、誠知られて早蕨の、手を合せ礼拝し御僧の前に踞く（古典文庫本「径山寺」）

茂木の下根春さむみ、萠え出で兼ぬる早蕨の、手をみせぬ事ぞ悲しき（謡曲叢書本「碁」）

花下忘歸因美景　樽前勸醉是春風（白楽天）

花の下に帰らん事を忘るるは美景に依りてなり、樽の前にゑひをすすめては是春の風をさまつて、枝をならさぬ花の粧ひ（謡曲叢書本「鼓瀧」）

いざなはれ行や東山、酔をすすめて花の下　帰らん事を忘れしに（古典文庫本「住吉物狂」）

花の下に帰らん事を忘るるは、美景によつてなり、樽の前に酔を勧めては是春の風（古典文庫本「御坊曽我」）

花をもてあそび、美景に酔を進めつつ（古典文庫本「甘糟」）

背燭共憐深夜月　踏花同惜少年春（白楽天）

先穂にいでば深夜の月、友に哀れむ叡慮の手向、実も妙なる御法の声、篁が亡魂顕れたり（古典文庫本「篁」）

灯を背けては共に憐む深夜の月、花を踏では同じく惜む少年の、春の気色も一入に（古典文庫本「鞍馬」）

倚松根而摩腰　千年之翠滿手　折梅花而挿頭　二月之雪落衣（尊敬）

松根に倚つて腰を摩れば、千年の翠手に満てり（日本古典文学大系本「阿古屋松」・謡曲叢書本「異国退治」）

春之暮月　月之三朝　天醉于花　桃李盛也（菅原道真）

実に面白や盃の、光もめぐる春の夜の、有明桜てり勝り、天花に酔へりや（謡曲叢書本「鼓瀧」）

天花に酔り、我も又酔たり、時は花の春、汲ば菊の酒、千代も経ぬべし（古典文庫本「御坊曽我」）

思ひ出たり春の暮月、月の三朝天花に　酔りとも　吟ぜし事はたがはず（古典文庫本「春日神子」）

凝石遲来心竊待　牽流遄過手先遮（菅原雅規）

色も閑けき春の水、流にひかれて盃の、手まづさへぎる心かな（謡曲叢書本「鼓瀧」）

花ずり衣立ちよる浪の川ぞひ柳の絲ながき、春のまとゐも様々の、流に引かるる盃も（謡曲叢書本「広基」）

Osaka Shoin Women's University Repository

語り慰み夜もすがら、影も廻るや盃の、手まづさへぎる曲水の、水もらさじと諸共に（謡曲叢書本「愛寿忠信」）
とりとめがたき盃の　石にさはるか　まて暫し　ゆくもゆかれぬ　秋の水の　流に引れて盃を、とらじとすれど、手先さへぎる　去とては酒をたび給へ（古典文庫「猩々前」）

○拂水柳花千萬點　隔樓鶯舌兩三聲（元稹）
水をはらふりうくわは波こそ枝となりぬれ（謡曲叢書本「神有月」）

人無更少時須惜　年不常春酒莫空（小野篁）
花は根に鳥は古巣にかへれども、人更に若きにかへる事なし（謡曲叢書本「経書堂」）

○雞既鳴今忠臣待旦　鶯未出今遺賢在谷（謝観）
星をいただき庭鳥の、朝をまつや君が為、時を迎へし身なれども（謡曲叢書本「侍従重衡」）
鶏既に啼きて忠臣朝を待つ、君を守りの御代のみざき、疑ふ人は愚やな（謡曲叢書本「鶏竜田」）

鶯聲誘引來花下　草色拘留坐水邊（白楽天）
朝には鶯の　声に誘はれて金谷の、花をもてあそび（古典文庫本「甘糟」）

養得自爲花父母　洗來寧辨藥君臣（紀長谷雄）
草木は雨より生じて花葉をわかち、養ひえてはおのづから、花の父母ともなりやせん（謡曲叢書本「千手寺」）
それ雨露は花の父母として、色を養ひ匂ひをます（謡曲叢書本「経書堂」）
此の年月の養育のかげ、有り難き花のあめ、養ひ返しまゐらせん（謡曲叢書本「稲舟」）

誰言春色從東到　露暖南枝花始開（菅原文時）
誰かいつし春の色は、東より来れ共、南枝花初めてさくと、詠めしも此梅にかぎれる春の花とかや（古典文庫本「北野物狂」）

遙見人家花便入　不論貴賤與親疎（白楽天）
貴賤と親疎を論ぜざるは　春のならひなる物を、夜もすがらうちとけて　御物がたり申さん（古典文庫本「鞍馬」）

誰謂水無心　濃艶臨今波變色　誰謂花不語　輕漾激影動脣（菅原文時）

Osaka Shoin Women's University Repository

誰かいつし花物言はずとは、軽漢逆臣の害をのがるるうれしさよ（謡曲叢書本「守屋」）

咲き乱れたる花どもの、物言ふことはなけれども、軽漢激して影唇を動かせば、花の物言ふは道理なり（日本古典文学大系本「丹後物狂」）

○甕頭竹葉經春熟　階底薔薇入夏開（白楽天）

もたひの　ほとりの竹葉　又はしのもとのしやうびも、理りや増り草、万代かけて頼む（古典文庫本「猩々前」）

○風生竹夜窓間臥　月照松時臺上行（白楽天）

風のたけにしやうずる夜、窓の間に臥、月の松をてらす時、台上を行とうたひたり（古典文庫本「春日神子」）

○不是禪房無熱到　但能心靜即身涼（白楽天）

只よく心静なれば則身も涼しと、古き詩にも候へば、暑きも寒きも心よりなすわざ候よ（古典文庫本「芳野天狗」）

池冷水無三伏夏　松高風有一聲秋（源英明）

然るに其水上を尋ぬるに、北田の境、ぜざんの気いぼくをなし、冷かにして水三伏の夏をしらず（謡曲叢書本「大般若」）

一聲山鳥曙雲外　萬點水螢秋草中（許渾）

一声の山鳥、曙雲の外、虎かうくしてせうもんにいる（謡曲叢書本「豊干」）

○螢火亂飛秋已近　辰星早没夜初長（元稹）

げにや心なき身にも哀はしられけり、鳴たつさは田秋近く、螢飛びちる夕の空（謡曲叢書本「千手寺」）

○風從昨夜聲彌怨　露及明朝淚不禁（大江朝綱）

面白や風は昨日の夜より声いよいよかはり（謡曲叢書本「千引」）

風は昨日の夜より声いよいよ替り（古典文庫本「生卒都婆」）

林間煖酒燒紅葉　石上題詩拂緑苔（白楽天）

紅葉の下には、林間の局（謡曲叢書本「鞠」）

げにや古き詩に、林間に酒を煖め、紅葉を焚かん其頃も、誰をか共に見るべき（同）

林間に酒を煖めて、紅葉を燃くと云ふ、秋の詩の心を、かほど賤しき其身の、知れるよな（謡曲叢書本「紅葉」）

Osaka Shoin Women's University Repository

実に石上に詩を題して、緑苔を払ふ時とかや（謡曲叢書本「豊干」）

秋は紅葉の木の本に、あたため酒のたぐひまで、豊なる身の住居かな（謡曲叢書本「巴園」）

林間に酒をあたためて、紅葉たく火は秋の暮（謡曲叢書本「侍従重衡」）

○蔓草露深人定後　終霄雲盡月明前（小野篁）

万草に露深し、人静まつて更くる夜に、訪らふ人も柴の、扉をたたくは風やらん（謡曲叢書本「千引」）

万草露深し、人鎮まつて更る夜に、こととふ人は何者ぞ（古典文庫本「生卒都婆」）

織錦機中已辨相思之字　擣衣砧上俄添怨別之聲（公乗億）

錦をおるはた物のうちに、相思の字を顯し、衣うつ砧のうへに、怨別のこゑもやそふ（謡曲叢書本「七夕」）

○三五夜中新月色　二千里外故人心（白楽天）

三五夜中の新月の色、二千里の外の故人の心（謡曲叢書本「水尾山」）

三五夜中の新月の、夜半の空くまなくて（謡曲叢書本「不逢森」）

秋水漲來舟去速　夜雲收盡月行遲（野展郢）

秋の水みなぎり落て、船の去事速やか也、四方の風をさまりて、月の夕べも更過る、潯陽の江の浪枕、うきね定めぬ此身哉（古典文庫本「猩々前」）

秋の水みなぎりおちて舟の去る事すみやかなり（謡曲叢書本「稲舟」）

処もかうほの江も近し、秋の水みなぎり落ちて、舟のさる事すみやかなり、よるの雲をさまりつきて、月の行く事遅し（謡曲叢書本「安字」）

○天山不辨何年雪　合浦應迷舊日珠（三統理平）

てんざんには弁へず、いづれの年のゆきぞ、がつぽにはまどひつべし旧日の、玉の威徳はありとても（謡曲叢書本「太施太子」）

花色如蒸粟　俗呼爲女郎　聞名戲欲契偕老　恐悪衰翁首似霜（源順）

いやとよ、女は花色にあまれと云ふ事あり、女郎と書けばをみなへしを只一番にたて給へ（謡曲叢書本「花軍」）

Osaka Shoin Women's University Repository

是はまた墨の衣にそめ川の、墨の衣にそめ川の、色も女郎の身を知れば、心つくしのたはれ島の、たはぶれに名を聞くだに、偕老を契るなるに、ざれ事なのたまひそ（謡曲叢書本「濡衣」）

○前頭更有蕭條物　老菊衰蘭三兩叢（白楽天）

黄菊すゑらんさんりやうさう、匂ひ争ふ気色かな（謡曲叢書本「花軍」）

松樹千年終是朽　槿花一日自爲榮（白楽天）

身は是槿花一日の栄、命は蜉蝣の定なきに似たり（古典文庫本「高館」）

松樹千年つひに朽ちぬ、槿花一日栄たるべし（謡曲叢書本「宗貞」）

それ蜉蝣といへる小虫は、朝に生じて夕に死す、人間以て異にあらず、槿花一日の栄に同じ（謡曲叢書本「惟盛」）

千年の松も終には枝朽ちぬ、三千年になるてふ桃園の宮もなし、一日の槿花も、一度の栄はあるものを（謡曲叢書本「朝顔」）

○隨嵐落葉含蕭瑟　濺石飛泉弄雅琴（源順）

嵐にしたがふ木々の落葉は、簫瑟をふくみ、石に濺ぐ飛泉の声は、雅琴を弄ぶ（謡曲叢書本「陀羅尼落葉」）

○萬里人南去　三春雁北飛　不知何歳月　得與汝同歸（韋承慶）

万里の人南に去り三春の雁北に飛ぶ、行く雁は古郷なれど、心さも急がれてこそ飛鳥の（謡曲叢書本「一来」）

万里にして人南に去り、三春の雁北に飛ぶ（謡曲叢書本「陀羅尼落葉」）

八月九月正長夜　千聲萬聲無了時（白楽天）

砧は千声万声、碁は、百度千度万手、空蝉は負けたり（謡曲叢書本「碁」）

○三秋岸雪花初白　一夜林霜葉盡紅（温庭筠）

それ三秋の岸雪は、花初て白し、一夜のりんさうは葉ことごとく紅也（古典文庫本「育王山」）

曉入梁王之苑　雪滿群山　夜登庾公之樓　月明千里（謝観）

曉梁王の苑に入りぬれば、雪群山にみつ。夜庾公が楼に上れば、千里にあきらかなる有明の、月の都を思ひやる（謡曲叢書本「刀」）

Osaka Shoin Women's University Repository

銀河沙漲三千里　梅嶺花排一萬株（白楽天）

ぎんがいさごみなぎる、まなこを三千界のうちにさらし（謡曲叢書本「空也」）

班女閨中秋扇色　楚王臺上夜琴聲（尊敬）

月もさし入るねやのうち、風すさましく秋ふけて、班女の閨の中には秋の扇の色、楚王の台の上にはよるの琴の声（謡曲叢書本「小環」）

春風暗剪庭前樹　夜雨偷穿石上苔（傅温）

伐ること勿れ春風の、庭前の木をきるも空にといへば目に見えぬ、鬼神よりも恐ろしき、太子の御はかりこと（謡曲叢書本「守屋」）

それ春の風は空に庭前の木をきり、夜の雨はひそかに石上の苔をうがつ（謡曲叢書本「鼓滝」）

春の風は空に庭前の木を剪り、夜の雨はひそかに、石上の苔をやうがつらん（謡曲叢書本「大木」）

山遠雲埋行客跡　松寒風破旅人夢（紀齊名）

山遠くしては雲行客の跡を埋み、松寒うしては風旅人の夢を破る、あら物すごの景色やな（謡曲叢書本「鈴鹿」）

山遠くしては雲行客の跡をうづみ、松寒うしては風旅人の夢を破ると聞く、風の気色も秋毎に、慰み多き詠めかな（謡曲叢書本「信貴山」）

余りに山を遠く来て、雲又路を立ち隔て（謡曲叢書本「大般若」）

九夏三伏之暑月竹含錯午之風　玄冬素雪之寒朝松彰君子之德（源順）

松は君子の徳ありて、雨露霜雪もおかさず（謡曲叢書本「鼓滝」）

玄冬素雪の寒き朝には、まつ君子の徳を彰すなり（謡曲叢書本「異国退治」）

玄冬素雪の寒き夜半も、知らざりし室の戸に、明かし暮らして過せしに（謡曲叢書本「身売」）

十八公之榮霜後露　一千年色雪中深（源順）

十八公の松が枝は霜の後に露れ、一千年の色雪の中に深しと見えたり（謡曲叢書本「異国退治」）

松は古今の色をわき難く、年はふれ共若緑の、十八公の栄は霜の後に顕ると、古人の云しぞ　誠なる（古典文庫本「育王

Osaka Shoin Women's University Repository

山」）

それ十八公の栄は霜の後に露れ、また一千年の色は雪の中に深し（日本古典文学大系本「阿古屋松」）

晋騎兵参軍王子猷栽稱此君　唐太子賓客白樂天愛爲吾友（菅原篤茂）

そもそも竹はすぐにして内清し、七賢も此林にすみ白楽天は友といへり（謡曲叢書本「実方」）

○鶴歸舊里丁令威之詞可聽　龍迎新儀陶安公之駕在眼（都良香）

旧里を出でし鶴の子の、松にかへらぬ淋しさよ（謡曲叢書本「正儀世守」）

飢鼯性躁忿々乳　老鶴心閑緩々眠（都良香）

袂をかはし手をふれて、なくや夜鶴のねぶれるかと、唯くわんくわんとよりゐたり（謡曲叢書本「惟盛」）

瑤臺霜滿一聲之玄鶴唳天　巴峽秋深五夜之哀猿叫月（謝観）

夜の鶴は　子を思つて籠の中になき、哀猿月に叫ぶ皆、是恩愛の情なり（古典文庫本「住吉物狂」）

○谷静纔聞山鳥語　梯危斜踏峽猿聲（大江朝綱）

谷静かにしてはわづかに聞く山鳥の語、橋危うしては斜に踏む峽猿の声、聞くも悲しき老の身の、足弱車に引かされて、火宅を出づべきうれしさよ（謡曲叢書本「愛宕空也」）

第一第二絃索々　秋風拂松疎韻落　第三第四絃冷々　夜鶴憶子籠中鳴　第五絃聲最掩抑　瀧水凍咽流不得（白楽天）

猛き心も弱々と、子を思ふ夜の鶴、涙も繁き袂かな（謡曲叢書本「治親」）

夜の鶴は　子を思つて籠の中になき（古典文庫本「住吉物狂」）

才一才二の絃は、索々たり、才三才四の　絃は、冷々として、秋の風の、音は村雨（古典文庫本「逢坂物狂」）

晋建威將軍劉伯倫　嗜酒作酒德頌以傳於世　唐太子賓客白樂天　亦嗜酒作酒功賛以繼之（白楽天）

彼太子の賓客　ほうじゆてきくわと詠めけん（古典文庫本「猩々前」）

○垂釣者不得魚　暗思浮遊之有意　移棹者唯聞雁　遙感旅宿之随時（菅原道真）

夫れ釣をたるる者は魚をえず、空にふようの情ありといへども、是ほど魚のくはぬ事よもあらじ（謡曲叢書本「西宮」）

Osaka Shoin Women's University Repository

○雞人曉唱　聲驚明王之眠　鳧鐘夜鳴　響徹暗天之聽（都良香）
雞人曉を唱ふ声、明王の眠を驚かす、御寝もならざるに（謡曲叢書本「紅葉」）
○荒籬見露秋蘭泣　深洞聞風老檜悲（源英明）
深洞に風すぼく、老檜かなしむ声も袂をうるほすや（謡曲叢書本「鼓滝」）
謬入仙家雖爲半日之客　恐歸舊里纔逢七世孫（大江朝綱）
しばしやすらふ山人の、斧の柄朽ちて帰りしは、七世の孫にあふとかや（謡曲叢書本「信夫」）
昔のよにも誤りて、仙家に入りし人だにも、旧里に二度帰るなれば、只誤りをゆるしつつ、花若を助けおはしませ（謡曲叢書本「女沙汰」）
○通夢夜深蘿洞月　尋蹤春暮柳門塵（菅原文時）
夢にてうつるに夜更けぬらん、らとうの月、跡を尋ぬるに春くれぬ、只山辺の声のみ空に橋立の（謡曲叢書本「獅子」）
○漁夫晩船分浦釣　牧童寒笛倚牛吹（杜荀鶴）
面白や牧童の寒笛は、牛によつて吹、漁夫の夕の船は、浦を分けて急ぐ（謡曲叢書本「西宮」）
山路日落　滿耳者樵歌牧笛之声　澗戸鳥歸　遮眼者竹煙松霧之色（紀齊名）
山路に日暮れぬ樵歌牧笛の声、人間有為の世の理、物事にさへぎる眼の前、実に目前の心かな（謡曲叢書本「大般若」）
いや木樵も歌をうたへばこそ、樵歌牧笛とは申し候へ（謡曲叢書本「信夫」）
月隱重山今　擎扇喩之　風息大虛今　動樹教之（智者大師）
月重山に隠れぬれば、扇を　挙て是を喩へ、風　大虛に息ぬれば、樹を動（か）して是を、教への外の道なれば（古典文庫本「寒山」）
月重山にかくれぬれば、扇をあげて是をたとへ（謡曲叢書本「泣不動」）
願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤　飜爲當來世々讃仏乘之因轉法輪之縁（白楽天）
風月延年の遊楽も、狂言綺語の一てん、讃仏乘の因縁まで（謡曲叢書本「籠祇王」）
実々、是も狂言綺語を以て、讃仏転法輪の誠の道にも入るなれば（謡曲叢書本「西岸居士」「隠岐院」）

Osaka Shoin Women's University Repository

今は狂はじとおもへ共去ながら、狂言綺語を以て、讃仏転法輪の真の道に入ときけば（古典文庫本「由良物狂」）

雖十悪今猶引攝　甚於疾風披雲霧（具平親王）

十悪といふとも、引摂すべし（謡曲叢書本「上人流」）

○玉磬聲思管絃奏　納衣僧代綺羅人（都良香）

有りし世を思ひも出でじ今ははや、妙なる御法の値遇の縁に、玉磬の声は管絃を奏する事を思ひ、納衣の僧は綺羅の人に越えたり、いよいよ仏果を授け給へ（謡曲叢書本「陀羅尼落葉」）

○風飜白浪花千片　雁點青天字一行（白楽天）

風白浪をひるがへせば、花せんべんの春の釣（謡曲叢書本「西宮」）

○見天台山之高巖　四十五尺波白　望長安城之遠樹　百千萬萃蕣青（源順）

天台には四十五色の波たかかるべきに（謡曲叢書本「仲算」）

前途程遠　馳思於雁山之暮雲　後會期遥　霑纓於鴻臚之曉涙（大江朝綱）

前途程遠し、思ひをがん山の、夕の雲にはつす（謡曲叢書本「御室経正」）

○蒼波路遠雲千里　白霧山深鳥一聲（橘直幹）

蒼波路遠し、望みを万里の外にかけ（謡曲叢書本「空也」）

漢高三尺之劔　坐制諸侯　張良一卷之書　立登師傅（後漢書）

譬へば漢の高祖の、楚王を責んとて、蕭何韓信を左右にたて、三尺の剣をひつさげしも是にはいかでまさるべき、されば

よ其はゐながら、天下を取りし梓弓（謡曲叢書本「小林」）

漢王三尺の剣、居ながら秦の乱れを始めたり（謡曲叢書本「美人揃」）

漢王三尺の剣の、光り此神に、たまたま参詣の、有り難ければ顕れて（謡曲叢書本「西宮」）

○仁流秋津洲之外　惠茂筑波山之陰　淵變作瀬之聲　寂々閉口　沙長爲巖之頌　洋々滿耳（紀淑望）

淵へんじて瀬と成る声なく、砂長じて巖の松の、苔のむす迄かはらぬ此君の（謡曲叢書本「信夫」）

刑鞭蒲朽螢空去　諫鼓苔深鳥不驚（小野国風）

Osaka Shoin Women's University Repository

ぐせいの訴へ止まりて、かんこも朽果つる、延喜　天暦の御代とは　今の世迄も伝へたり（古典文庫本「一夜天神」）

諫鼓苔むし　鳥驚かぬ、四つの海、治まる御代と、云捨明神は　あがらせ給へば（古典文庫本「近江八景」）

うつ音おほき浪のつづみの、ねがふままなる君が代の、諫鼓に苔むし、鳥おどろかぬ此御代の、あはれ目出度砌かな（謡曲叢書本「馬融」）

逢坂山や夕付げの、鳥驚かぬ御代なるに（謡曲叢書本「宗貞」）

○三尺劍光氷在手　一張弓勢月當心（陸虬）

一張の弓のいきほひ、はんげつむねの間にかかり、さんせきの劍のかげは秋の霜（謡曲叢書本「貞任」）

○雪中放馬朝尋跡　雲外聞鴻夜射聲（羅翬）

雪中に馬を放つて、朝に跡を尋ね、雲外に雁を聞て夜声を射る、古人の心も思ひしられて候（古典文庫本「雪頼朝」）

○雄劍在腰　拔則秋霜三尺　雌黃自口　吟亦寒玉一聲（源順）

さんせきの劍のかげは秋の霜、腰のまはりに横たはり、むかしに帰る衣川の（謡曲叢書本「貞任」）

燈暗數行虞氏涙　夜深四面楚歌聲（橘広相）

唐土我朝高き賤しき品こそかはれ、数行虞氏が涙もやはか我等が涙にはまさり候ふべき（謡曲三百五十番集本「横山」）

虞氏が閨の内には灯をくらうする涙を催す（謡曲叢書本「空也」）

胡角一聲霜後夢　漢宮萬里月前腸（大江朝綱）

それ尺八といつぱ、漢の元帝の后、王昭君胡国のえびすにとらはれて、漢宮万里の秋の空、故郷を思ひし忍びねを、学ぶが今の尺八なり（謡曲叢書本「籠尺八」）

琴詩酒友皆拋我　雪月花時最憶君（白楽天）

琴詩酒の友もこれなれや、只三人隔てなくいざや遊ばむ（謡曲叢書本「虎送」）

金谷醉花之地　花毎春匂而主不歸　南樓嘲月之人　月與秋期而身何去（菅原文時）

金谷の、花をもてあそび、美景に酔を進めつつ、遅々たる春の永き日も、夢の栄花に身を忘れ、夕の雲に催され　南楼の月を嘲りて（古典文庫本「高館」）

Osaka Shoin Women's University Repository

○専諸荊卿之感激　侯生豫子之投身　心爲恩使　命依義輕（後漢書）

二心なき弓取の、命は恩の為に　軽むずる　忠臣の法ぞ誠なる（古典文庫本「楊賀」）

其時小林命は義に依つてかろしといへり（謡曲叢書本「小林」）

其時貞任、命は義に依て軽き故、貞任終に亡びしかど（謡曲叢書本「貞任」）

○言下暗生消骨火　咲中偷鋭刺人刀（良春道）

劣らじ物と白真弓、やたけ心も一入に、怖しやゑみのうちなる其刀（謡曲叢書本「広基」）

○嘉辰令月歡無極　萬歳千秋樂未央（謝偃）

流れ久敷澄る代の、天長地久嘉辰令月の、御影曇らぬ有難さよ（古典文庫本「近江八景」）

長生殿裏春秋富　不老門前日月遲（慶滋保胤）

長生殿のうちには、春秋を止め、不老門の前には、日月おそし（謡曲叢書本「真名井原」）

長生殿の裏には、春秋を留むとかや（謡曲叢書本「百足」）

○爲君薫衣裳　君聞蘭麝不馨香　爲君事容飾　君見金翠無顔色（白楽天）

君が為に衣裳に薫物すれ共、君蘭奢を聞ながら馨香せず、君が為にようしよくを事とすれ共、君金翠を見ながら顔色なしといへり（古典文庫本「櫃切曽我」）

実やいにしへの君が蘭麝は、にほふがおもしろう候ひしが、此薫物は引きかへて、にほふがつらう候（謡曲叢書本「信夫」）

更闌夜靜　長門閉而不開　月冷風秋　團扇杳而共絶（張文成）

更闌夜静に長門げきとしてひらかぎるに、妻戸の扉はくわらりと開けて黒雲一村飛入て、病者の上にぞかかりける（古典文庫本「春日神子」）

さるほどにかうたけ夜静にして、せうもんとぢて開かぬに（謡曲叢書本「家持」）

春風桃李花開日　秋露梧桐葉落時（白楽天）

それ春風桃李花の開くる日、秋露梧桐葉の落つる時（謡曲三百五十番集本「落葉」）

Osaka Shoin Women's University Repository

それ草木心なしといへるも、春風桃李花の開くる日、秋露梧桐葉の落つるとき（謡曲叢書本「柳」）

觀身岸額離根草　論命江頭不繫船（羅維）

有難くも姫君の仰には、髪をそり修行して、水の泡岸の額の根なき草を観ぜよ（古典文庫本「革袴」）

蝸牛角上爭何事　石火光中寄此身（白楽天）

悲しき哉　蝸牛の角の上に、何をか争ひ　胡蝶の夢の内に、何をかたのしまむ（古典文庫本「寒山」）

あだなる花の梢かや　蝸牛の角の上にして、あらそふ事ぞはかなき（謡曲叢書本「千手寺」）

朝有紅顔誇世路　暮爲白骨朽郊原（藤原義孝）

人は唯栄花の枝を広く連ね、錦の袖を厚く重て世路に誇るといへ共、頓而白骨と成て郊原に朽ぬ（古典文庫本「楠」）

それ朝に紅顔有て、世路に楽むといへ共、夕べには白骨と成て郊原（に）朽ぬ（古典文庫本「臼杵」）

朝に紅顔あつて、世路にたのしむといへども、夕べには白骨となつて、郊原に朽ち果てし、木津川の波と消えて、あはれなる跡なれや（日本古典文学大系本「笠卒都婆」）

面々はわづかなる浮世の内の楽びをむねとし、色を飾り縁をもつぱらとすとも、終には白骨と、郊原に朽ちむ事夕をしらず（謡曲叢書本「上人流」）

（二）三　体　詩

○金殿當頭紫閣重　仙人掌上玉芙蓉（王建）

伝へ聞く仙人掌上玉芙蓉、漢武いしなくかうがいをすふ（謡曲叢書本「露」）

○緑樹重陰蓋四隣　青苔日厚自無塵（王維）

緑樹重陰四林におほひ、青苔日々に厚うして、おのづから塵なき木の本をはらはぬ風のあさぎよめ、紅さそふあらしかな（謡曲叢書本「巴園」）

月落烏啼霜満天　江楓漁火對愁眠　姑蘇城外寒山寺　夜半鐘聲到客船（張継）

月は落ち、寒鴉こぼくに音づれて、寒鴉こぼくに音づれて、冷じかりし楓橋を、夜ふかくたどり行く末の、江村の漁火も

Osaka Shoin Women's University Repository

ほのかにて、客船に到り山を越え、朝な朝なの数つもる、夕の空は物すごや、夕の空は物すごや（謡曲叢書本「豊干」）

○磐石垂羅只是家　回頭猶看五枝花（秦系）

尉がすみかはここなれや、はんせきするらただ是家（謡曲叢書本「巴園」）

○柳塘烟起日西斜　竹浦風回雁弄沙（鮑溶）

江天の暮雪は、浜の真砂の白妙に、柳塘霧晴れて、日は西に斜なり。竹浦の風廻つて、雁は沙を哢すとかや（謡曲叢書本「水尾山」）

○停車坐愛楓林晩　霜葉紅於二月花（杜牧）

誰か云つし霜葉は、二月の花よりも紅なりとは、車をとどめてそぞろに愛せば、色こそ花の木陰なれ（謡曲叢書本「吉野詣」）

○宿雨初收草木濃　群鴉飛散下堂鐘　長廊無事僧歸院　盡日門前獨看松（李渉）

面白や、宿雨はじめてをさまり、草木こまやかなり、群鴉とびつくすげだうのかね、ちやうらうぶじにして僧院に帰る、げにひめもすに門前に、ただひとり見る松陰の、こけの下道しづかなり（謡曲叢書本「韋駄天」）

○節去蜂愁蝶不知　曉庭還繞折殘枝（鄭谷）

伏見の竹の、直なる御代も、いく千代やへがさね九重ねや終日の、折り残す枝をめぐるも、胡蝶の夢の戯れも（謡曲叢書本「花軍」）

○罷釣歸來不繫船　江村月落正堪眠　縱然一夜風吹去　只在蘆花淺水邊（司空曙）

実や釣をやめ、帰りさつて船をつながず、江村月落てまさにねふるにたへたり、小船とて一夜風ふかざれ共、ただろくは、山水の辺にあり（古典文庫本「飛加美」）

洞庭の秋の月、四方の山々見え渡る、釣をやめ帰り来て、船をば更につながず、江村風穏に、まさに眠堪へたり（謡曲叢書本「水尾山」）

○春潮帶雨晩來急　野渡無人舟自横（韋応物）

野渡人なうしておのづから、浮ぶや繋かる船ならん（謡曲叢書本「浦島」）

Osaka Shoin Women's University Repository

○登々山路何時盡　決々溪泉到處聞　風動葉聲山犬吠　一家松火隔愁雲（盧綸）
登々たる山路いづれの時か尽きん、決々たる溪泉到る所に聞く、風葉声を動かして山犬吠ゆ、いづれの松火秋雲を隔つ、あら心すごの山洞やな（謡曲叢書本「葛城天狗」）

○瓶收枸杞懸泉水　鼎鍊芙蓉伏火砂（包佶）
ひやうにはくこけん仙の水、又かなへにはふようふくくわの、しやをねるすまひも目前、見る目にあまる橘の（謡曲叢書本「巴園」）

○殘星幾點雁橫塞　長笛一聲人倚樓（趙嘏）
ざむせいいくばくてんぞ、関峡に横はる、長笛一声人楼による（謡曲叢書本「狭衣」）

○胡蝶夢中家萬里　杜鵑枝上月三更（崔塗）
胡蝶夢中の春も過ぎ、杜鵑枝上の夏は来て、時鳥鳴く声きけば別れにし、故郷さへぞ恋草の（謡曲叢書本「柴田」）

（三）白氏文集

○鐵擊珊瑚一兩曲　氷寫玉盤千萬聲（五弾絃）
青海波にもなりぬれば、せんさむごを砕きて、氷玉盤に落つる響き、軒の松風吹き落ちて（謡曲叢書本「柳」）

○翠華不來歲月久　墻有衣今瓦有松（驪山高）
面白やな花の都の北山陰、紫野に来て見れば、夢に見しごとくの古跡と見えて、甍破れ瓦に松生ひたる気色なるに（日本文学大系本「雲林院」）

香煙引到焚煙處　既來何若不須臾（李夫人）
立ち去りて跡もなく、かたちも消えて跡はただ、煙ばかりぞ反魂の、孝行の子ならば、などや暫しもとどまらぬ（謡曲叢書本「不逢森」）

天上人間會相見　臨別殷勤重寄詞（長恨哥）
さんかのしうしき長天と一色にして、天上人間たまたまあひみる、あら面白の折からやな（謡曲叢書本「狭衣」）

Osaka Shoin Women's University Repository

太液芙蓉未央柳　芙蓉如面柳如眉（長恨哥）

本来人間赤白の色どりに動き、芙蓉の眉美楊の髻を、飛陽の暮に散乱す（古典文庫本「革袴」）

龍顔誠に有難き、眉のあたりの打煙、未央の柳の幼けなき　御手を合せ御十念、高らかに遊ばし（古典文庫本「先帝」）

在天願作比翼鳥　在地願爲連理枝（長恨哥）

本より恋慕愛執のなか、我等夫婦にかぎらねども、わきて心も深みどり、たちそふ枝もむつまじく、連理比翼のちぎりをなししに（謡曲叢書本「樒塚」）

○潯陽江頭夜送客　楓葉荻花秋索索（琵琶行）

彼太子の賓客　ほうじゆてきくわと詠めけん（古典文庫本「猩々前」）

古墳何代人　不知姓與名　化作路傍土　年々春草生

古墳何れの国の人ぞ、姓と名を知らず、化して路傍の土となつて、年々春草生ず（古典文庫本「亀井」）

煙霞埋跡惜花暮　佐國弄身不待春

えんか跡を埋んで花の暮を惜み、袴国正に身を捨て、月の春を待たずと云ふ、詩の心迄も思ひ出られて候（謡曲叢書本「袴国」）

煙霞跡を埋んで花の暮を惜しみ、さこくまさに身を捨てて、後の春を待たざりしも今こそ思ひ知られたれ（謡曲叢書本「吉野琴」）

梟鳴松桂枝　狐藏蘭菊叢

狐蘭菊の、庭の草村にかくれ居て（謡曲叢書本「野干」）

あら淋しの深山の秋の夜や、梟松桂の枝に鳴き、狐蘭菊の花にかくるなる、月更け過ぐる物凄さよ（謡曲三百五十番集本「落葉」）

○老龍枝朽千年緑得秋　風拂枯木落葉滿蘭砌

らうれう枝朽ちて千年のみどり秋を得たり、風枯木をはらへば落葉らんせいにみつ（謡曲叢書本「小環」）

これはひき替へて、老い木の松の、姿はげにも、老竜の枝垂れて（日本古典文学大系本「阿古屋松」）

Osaka Shoin Women's University Repository

（四）新撰朗詠集

徳是北辰　椿葉之影再改　尊猶南面　松花之色十廻（大江朝綱）

まことなるかな松花の色、十回りをなす春秋の、いく久しさの色ならん（日本古典文学大系本「阿古屋松」）

松は百代の緑にて、松は百代の緑にて、十返りの色ぞ久しき（謡曲叢書本「太平楽」）

十返りの花を含むや若緑、花を含むや若緑、猶万歳の春の空（謡曲叢書本「鼓滝」）

げにや所から年ふる松の花までも、幾十かへりの色ならん（謡曲叢書本「巴園」）

○東船西舫悄無言　只見江心秋月白（白楽天）

潯陽と聞し名は、此川の辺り、東の船西の船、何れもとまり果ずして（古典文庫本「猩々前」）

○太行之路能摧車　若比人心是夷道（白楽天）

夫れ車を砕く岩よりも、人の心はさかしくて（謡曲叢書本「清重」）

鴛鴦瓦冷霜花重　舊枕故衾誰與共（白楽天）

伝へ聞く漢王は、李夫人の別ゆゑ甘泉殿の床の上に、ふるき衾のうらみをそへ（謡曲叢書本「不逢森」）

（五）百聯抄解

花因雨過紅將老　柳被風欺緑漸低

花は雨の過ぐるに依つて紅まさに老いたり、柳は風に欺かれて緑やうやく低れり（日本古典文学大系本「笠卒都婆」・謡曲叢書本「浦島」）

山外有山山不盡　路中多路路無窮

さんとに山あつて山つきず、路中に道多うして道きはまりなし（謡曲叢書本「融通鞍馬」）